

表現と対話でつくる！

行政で使いやすいデザインワークショップ

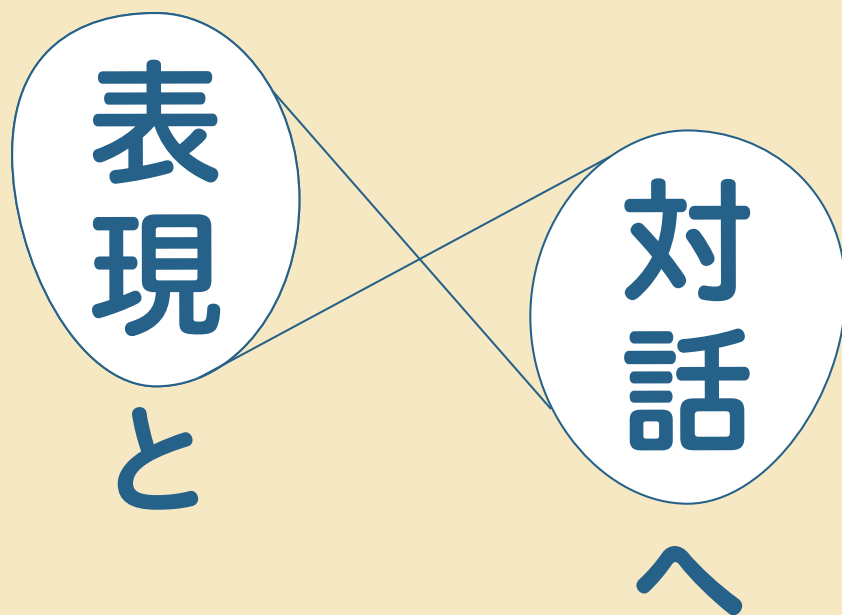


Design Initiative for Diversity and Inclusion

Design Initiative for Diversity and Inclusion

多種多様な文化や特性を持つ人々が共にによりよく生きる社会を目指すために、行政や福祉を含むあらゆる専門家に、さまざまな声に耳を傾けることが期待されています。自分たちはどのように物事を捉えているのか、市民や当事者が何を思っているのか。こうしたことを理解するには、何かを一方的に説明したり、いきなり議論をするのではなく、一緒に手を動かしたり、話をしたりしながら相手の立場に想像力を張り巡らせる〈場のデザイン〉が大切になります。このリーフレットでは、私たちが公開講座で実施した具体的なワークショップを中心に、誰でも気軽に楽しむことのできるちょっとした工夫を紹介しますので、ぜひ、身近なところで試してみてください。





何のために、どのように、ワークショップをするのか？

従来は、行政機関が社会の意識に働きかける手段として、不特定多数の人々に情報を伝え、啓発をするポスターなどの手段が用いられてきました。しかし、今や、情報を受け取る側の市民も多様化しており、共生の基盤を作るためには、行政、教育、企業、福祉などあらゆる領域で、画一的に構築されてきた仕組みを多元的、双方向的なものにしなければなりません。新型コロナウイルス感染症の影響もあって、自分自身が安心して帰属意識を持てる場所が少なくなり、ますます分断が進んでいるように見える社会で、誰でも参加者になれる「インフォーマルで小さな表現や対話の場」を作り上げる手段として、ワークショップは手軽で有効な手段だと考えられます。

それでは、具体的にどのようにワークショップをすれば良いのでしょうか。もちろん、デザインはニーズに応じて様々な形をとるものですが、ここでは、少し実際の具体的な手順のイメージを膨らませてみたいと思います。

ワークショップの手順

1

準備をする (1ヶ月～2週間前)



①目的を考える

まずは、自分自身が、誰を対象に、どのような問題について話を聞きたいのか、どのような表現の可能性を知りたいのか（目的と対象のイメージ）を整理します。そして、参加者が期待すること、例えば、相手と自分が共通して親しみやすいと思えるものをイメージしながら、参加したくなるようなアイデア出しをしていきます。



②環境を考える

参加者に主体的に参加してもらうためには、ワークショップを実施する環境を考えることも大事です。小さな部屋と大きなホールのどちらが安心できるか。参加者はどのように座れば話しやすいか。スタッフは必要か。また、メディアを使う場合には、どのような媒体やサービスを用いるのかなど、目的に応じてロジックを組み立てていきます。



③試行錯誤する

大まかな順番を決めたら、まずは職場の同僚やプライベートの知人に意見をもらったり、一緒に練習をしてみます。思いがけない発見や見落としがあるかもしれません。実際に試行錯誤をしながらより良いデザインを手探りで追求することを、デザイン用語では「プロトタイピング」と呼びます。



④告知する

日時や場所、テーマ、事前登録の有無だけでなく、計画を立てた人が何を目標にしているのか（例：ジェンダー平等に関する本音を聞きたい）、参加者はワークショップを通じて何をえられるのか（例：言えないでいることが具体的な改善につながる）を明らかにすることが、前向きな参加意欲を掻き立てる上で大事です。

2

ワークショップをする

3

ワークショップをする

(1時間程度の場合)



⑤参加者と打ち解ける

グループ分けや趣旨説明などの事前の作業を通じて、気軽に参加できる場の雰囲気を作っていきます。先にファシリテーター（対話を推進する役）が素の自分自身を表に出すことで、参加者も安心して手を動かしたり、言葉を投げかけることができるからです。



⑥問題意識を説明する

ワークショップの目的が分からないと楽しめない場合は事前に自分の意図を説明し、手を動かすプロセス自体を楽しむ場合は、後に種明かしをします。



⑦フィードバックを貰う

ワークショップが終わった後、主体性や創造性の観点から評価を行い、次に活かすために、最後に参加者から意見や感想を聞きます。直感的な印象が知りたい場合はその場で直接、丁寧に振り返った後の意見が知りたい場合は後日にウェブアンケートを取るなど、フィードバックの貰い方も吟味しておく必要があります。

ひろめていきましょう！

フィードバックを踏まえて対象や目的をずらしながら繰り返していくことで、場を生み出す技法が体系化されていきます。また、参加者に「自分自身ならどういう企画をするのか？」を考えてもらい、別の機会で別の人にワークショップを企画してもらうなど、小さな場づくりを広げていくための工夫をすることで、小さな場のネットワークができあがっていきます。

1

準備をする

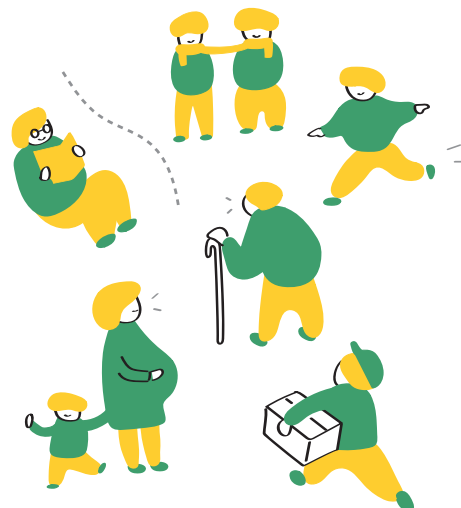
色々な角度から見てみる

まず、物事を多角的に理解する上で大事なポイントを考えてみましょう。

色々な人の立場になって考える

当事者

何かをデザインする際に他者への配慮は重要な要素です。しかしながら、自分自身が持つ当たり前の感覚に頼ると、それが見落とされ、不意に誰かを排除してしまうということになりがちです。公共とは誰に対しても開かれ、誰もが利用できることを意味しており、福祉を通じて誰もが通常の生活を送ることのできる環境を整備する「ノーマライゼーション」においても重要な理念です。そのためには、建造物にせよ、社会の仕組みにせよ、それを利用する様々な人の姿を想定し、実際に観察しながら、試行錯誤を繰り返すことで、誰もが利用できるものを作る必要があります。



他者

対話を通じて理解を深める

多様な人々が意思決定を行う時に重要なのが対話です。かつての公共空間では、マジョリティだけで自分達の社会のルールを議論し、その場から、女性、労働者、障害者、性的マイノリティといった集団は排除されてしまっていました。そうした傾向は未だに問題とされています。しかし、新しい物事の見方は、幅広い人々が物事を作り上げるプロセスに参加することで初めて見えてくるものです。公共から排除されてきた人々を包摂するためには、まず、個人個人が持つ身近な関心、すなわち、各々が自分自身について相互理解を深める場が必要となります。互いが立場や役割を超えて対等な存在として自分の見る世界を話す時に、その場にいる人々の価値観はより実りのあるものになります。



みんなの価値観を揺さぶる

社会・公共

想像や対話を通じて自分自身の中に他者の視点を取り込むだけでなく、誰かの価値観を揺さぶるような表現を活用することも重要です。例えば、残念ながら、「女性は受動的」といった単純化された偏見が未だに根強く見られます。とはいえ、こうした「ステレオタイプ」は色々な煩雑な判断を簡略化するために無意識に用いられることが多く、なかなか手強いものです。社会に働きかけ、ステレオタイプを解きほぐす上でよく用いられるのが、啓発を通じて偏見を修正するというアプローチですが、他の見方もあります。例えば、言葉と意味の結び付きを一度解体し、違う仕方で並べてみることで、ステレオタイプを書き換える斬新な表現が生まれるかもしれません。



2

ワークショップをする

表現を通して意識する

「境界線や差別の構造」の理解

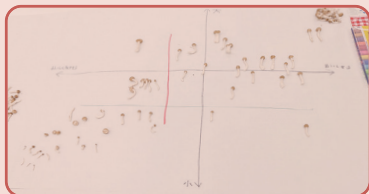
しめじやうずらの卵を並べる

日常生活においてどのように価値の尺度や境界線を用いて物事を眼差しているのかを、身近なものを利用して実感するためのワークショップです。

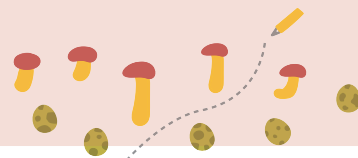


想定人数：3人～

用意するもの：模造紙（大きな紙）、しめじやうずらの卵など、ペン



- ① 大きな紙としめじやうずらの卵を用意します。大きさや形や色にばらつきがあるものであれば、他のものでも代用できます。紙にはペンで縦軸と横軸を書き加えて下さい。
- ② 参加者同士で話し合いながら、しめじやうずらの卵を横一列に並べてもらいます。例えば、「美味しそうな順」といった主観的なものでも、「大きい・小さい」といった客観的なものでも構いません。何かしらの尺度から順番に並べてもらいます。
- ③ 同じように、横軸とは別の尺度、例えば「見た目がきれいな順」で、横軸の並び順はそのままの状態、縦方向にしめじやうずらの卵をずらしていきます。すると、グラフ（散布図）が完成します。
- ④ グラフが完成したら、今度は線を引いたり囲ったりしながら、似たものをグループ分けしてもらいます。最後に結果を観察しながら、例えば、美味しそうに見えるものの特徴や、見た目がきれいなものの特徴を文章で表現してもらいます。



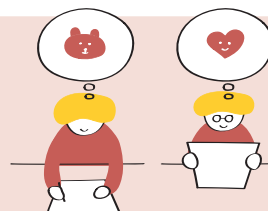
「わからないということ」とは

「かわいい」を表現する

図形などのイメージに対してどのような意味が与えられているのか、同じ情報に対する主観の違いを理解するためのワークショップです。

想定人数：2人～

用意するもの：コピー用紙（小さな紙）、カラーペン



- ① まず、参加者の一方に、ペンを使って簡単な図形や記号を組み合わせながら、自分の思う「かわいい」を表現してもらいます。
- ② その紙を見せず、言葉だけを使ってなるべく客観的に自分の描いたものを説明し、メモを書いてもう片方の参加者に渡します。
- ③ もう片方の参加者には、メモを手掛かりに相手の描いたものを再現してもらいます。
- ④ 互いに描いたものを見比べてもらいながら、伝わった情報のずれやぶれについて話し合ってもらいます。

私たちは一貫した論理性や定義で判断しているわけではありません。
考える前に、手を動かしながら、自分の考えや判断を表出させます。

「違いの共有」をする

ジェンダーニュートラルなピクトグラムをつくる

トイレや車椅子のマークなど、誰が見ても分かるように案内を記号化した「ピクトグラム」。
そのピクトグラムを作成してみることで、男と女を区別する表現を体感するワークショップです。

想定人数：1人～

用意するもの：パソコン

- ① パソコンを利用して九州大学の学生が制作した調査用サイトにアクセスしてもらいます。

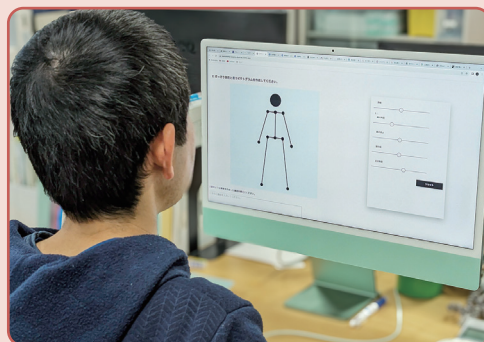


調査用サイト

<https://monumental-dolphin-8d47db.netlify.app/>



- ② 肩幅、腕の角度、腕の長さ、腰の幅、足の角度を調整しながら、男性のピクトグラムと女性のピクトグラムのイメージを作成してもらいます。
- ③ 次に同じ方法で、男性でも女性でもないピクトグラムのイメージを作成してもらいます。
- ④ 自分が作成したピクトグラムを見比べて何が男性的で、何が女性的で、何がニュートラルなのかをメモし、他の参加者がいる場合には共有して議論をします。



「自分のこと」にする

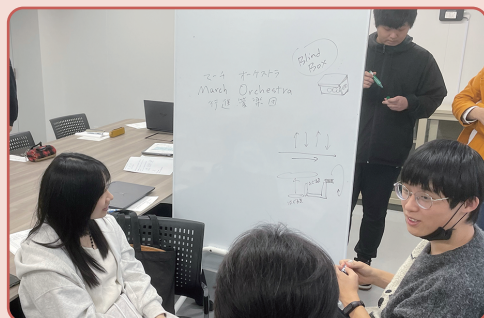
小さな政策を考える

架空の設定を設けて、私たちの身の回りの生活と関わる、普段は関心を寄せることのない政策や地域のことを自分事として考えてみるワークショップです。

グループ：5人～10人

用意するもの：特になし

- ① 空想の課題を設定します。例えば、新しい地下鉄を自分たちの住んでいる自治体に通すことになったとします。近所の市民病院の在り方などなんでも構いません。
- ② どの経路で線路を引き、どのような場所に駅があると良いのかなど、詳細を参加者全員で話し合います。この際、なるべく多様な人々にとっての利便性を考えます。
- ③ 最後に計画をまとめ、共有していきます。



3

ワークショップをする

メディアを用いて対話する

自分自身を開示する

対話に必要なのは、参加者全員が「自然体」で発言できるための工夫です。「何が正しいか」を議論するのも、専門家として客観的な知識を提示するのも、確かに重要なことです。しかし、対話では、自分自身の個人的な感想や体験を素直に、本音で打ち明けられるような親密な関係性を築き、個々の価値観を多様で実りあるものにすることが優先されます。そのためには、対話を企画する人が、モヤモヤして答えが見つからないことなど、自分自身の弱さや脆さを積極的に開示する役割を演じることが有効です。例えば、統計データなどのエビデンスを用いて一般論を提示するのではなく、あえて、主観的なエピソードを軸に「皆さんはどう思いますか？」と問いかけると、自分ならどう思うかを具体的にイメージし、発言しやすくなるのではないのでしょうか。もちろん、本音だからと言って何でもありにははいけません。「寛容のパラドックス」という言葉があるように、不寛容に対しても寛容である対話は成り立ちません。特定の人々を傷つけ、黙らせるような悪意ある発言や誹謗中傷を禁止するためのルールを作ることも重要です。

メディアを活用する

私たちは日頃から様々なメディアを通じてコミュニケーションをしています。そして、対面／遠隔、話す（聞く）／書く（読む）、映像／音声、匿名／実名など、メディアには様々な要素が含まれており、それによって対話の質や印象は変化するものです。そのため、自分達の対話に何が必要なのかを吟味しながらメディアを組み合わせ、DIYすることがより良い対話のために有効です。例えば、直接的に言いづらいことを聞きたい時には、話すよりも書く、実名よりも匿名の方が良いかもしれませんし、相手の感情を揺さぶりたい場面では文字よりも映像の方が良いかもしれません。あるいは、テレビのようにリアルタイムで情報発信するのと、ウェブサイトのコメント欄のように時間差で会話をするのでも異なる効果が見られるはずです。何が良い環境かは、人と人との関係性によって変わるので、想像力を押し広げながらそれを考えることも重要になります。

どのように呼びかけるのか？

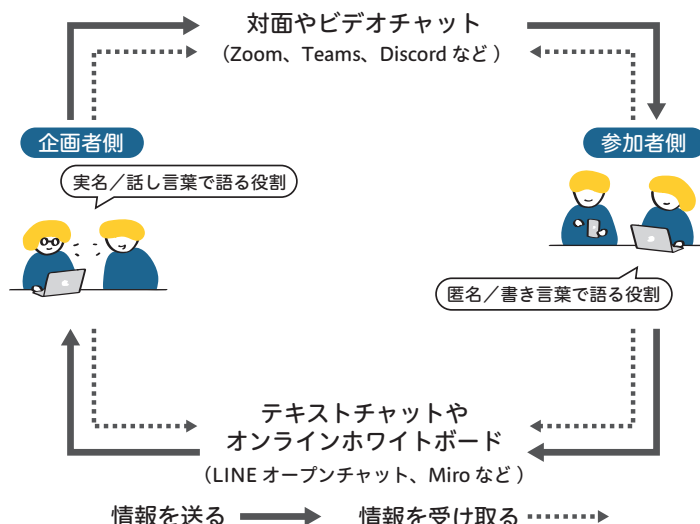
等身大の自分として話す
(公式的な立場を捨てる)

「分からない」を大事に
(説明ではなく疑問や共感)

相手との関係の自覚
(隠れた権力関係がないか？)

合意を目的としない
(色々な価値観を共有する)

例) 〈匿名性〉を用いたメディア・ワークショップ



どんな環境なら話しやすいか？

匿名性と書き言葉の活用
(面前では話づらい)

リアルタイム性の活用
(その場で話すことの連帯感)

誹謗中傷などの禁止措置
(寛容さの維持)

相手に配慮した環境の調整
(一緒に場をつくる)

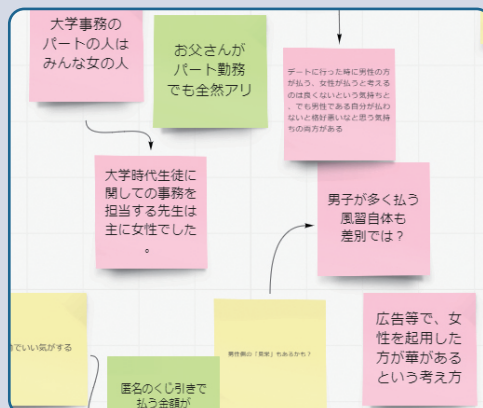
※デジタル機器を使わない方が良い場合も

色々な人が思うこと、考えていることを引き出すためには対話が重要です。
どのように工夫すれば良いのでしょうか。

パソコン(オンラインホワイトボード)を利用する

参加者がパソコンを用意できる場合、大人数が参加する場合にはオンラインホワイトボードを使うのがおすすめです。ここでは「Miro」の使い方を例に挙げます。

- ① 企画者が「Miro」のアカウントを作成し、ボードを作成します。
付箋を事前に用意します。
- ② ボードのURLとパスワードを参加者に共有し、ウェブブラウザのシークレットモードで参加してもらうことで匿名の状態にします(Googleアカウントなどの外部サービスでログインしていない環境が必要です)。
- ③ 参加者は企画者の話を踏まえて付箋にコメントを書き加えて配置します。企画者は気になったコメントを読み上げながら話をしていきます。参加者にも矢印などを用いて気になったコメントにレスポンスを送ってもらいます。

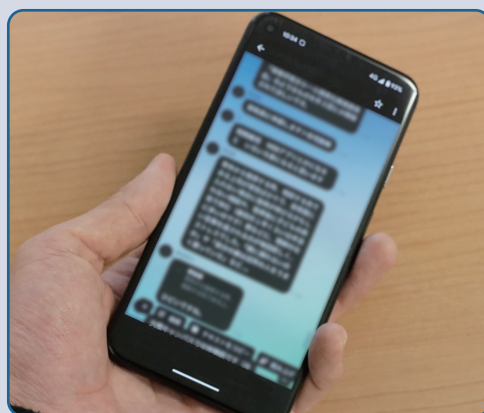


プロジェクターや画面共有機能を用いて、企画者がどのコメントを見ているのかを示すと参加者にも分かりやすくなります。あるいは、必要に応じて付箋を整理したり、話の段階に応じて色の違う付箋を使ってもらったりすることで、対話を促す工夫も重要です。

スマホ(テキストチャット)を利用する

参加者がパソコンを利用できない場合、あるいは少人数の場合には、スマホを利用するのがおすすめです。ホワイトボードとは異なり、縦方向(一方向)にコメントが流れていくことに注意が必要です。ここでは「LINEオープンチャット」の使い方を例に挙げます。

- ① 企画者が「LINE」にアクセスし、ホーム→サービス→オープンチャットの順番で「オープンチャット」にアクセスし、ルームを作成します。ルーム作成の際に「検索を許可」のチェックを外すことを忘れないようにして下さい。
- ② ≡→招待の順番でタップし、「QRコードをシェア」を選び、招待用のQRコードを作成し、参加者に共有します。
- ③ 参加者は企画者の話を踏まえてコメントを投稿し、企画者は参加者の投稿を読み上げながら話を進めていきます。参加者は気になったコメントをタップすることで、リプライを送ることもできます。



日本において「LINE」は多くの人々が利用しているチャットアプリであるため、特別な環境を用意せず、手軽に始められるのがメリットです。

【ワークショップ「メディアを用いて対話する」 過去の実践事例】

2022年6月30日 10:30～12:00

授業「デザイン・シビック」

対象：九州大学大学院芸術工学府の学生

2022年10月13日 10:30～12:00

九州大学大学院芸術工学研究院男女共同参画推進委員会 第1回対話型意見聴取会（オンライン）

対象：九州大学大橋キャンパス勤務の教職員

2022年10月19日 10:30～12:00

九州大学大学院芸術工学研究院男女共同参画推進委員会 第2回対話型意見聴取会（オンライン）

対象：九州大学大橋キャンパス勤務の教職員

2022年11月12日、19日 13:00～16:30

公開講座「対話のためのコミュニケーション・デザイン」

対象：主に行政や福祉に関連する職業の参加者

2023年5月11日 10:30～12:00

授業「デザイン・シビック」

対象：九州大学大学院芸術工学府の学生

2023年11月4日 13:30～16:30

公開講座「表現と対話から考えるためデザイン」

対象：主に行政や福祉に関連する職業の参加者





Design Initiative for
Diversity & Inclusion
社会包摂デザイン・イニシアティブ



九州大学
大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府 芸術工学部

Faculty of Design
Graduate School of Design, School of Design
Kyushu University



九州大学
KYUSHU UNIVERSITY